
legend • of • Mafia

Yuuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Legend・of・Mafia

【Nコード】

N4524F

【作者名】

Yuuki

【あらすじ】

主人公・勇希がマフィアと戦う物語。7人の幹部を集め、ファンファミリー、オダースとの戦いに挑む。マフィア、バツスラーファミリーに代々伝わる勇気の腕輪やマフィアカードの威力とは？1話1話が見逃せない白熱のストーリー。

Legend・1 マフィアになる!?

ウィーンウィーン。今回のターゲットは、あいつだな……。ピューン。
「ただいま。」

・・・少年が入ってくる。そして、少年は、二階に上がる。すると、そこにいたのは、鳥?いや、鳥型ロボットだ。

「早え〜じゃね〜か!黒木勇希」

「!?!」少年は、驚きを隠せなかった。それもそうだろう。鳥型ロボットがしゃべって、自分の名前まで知っている。勇希は、言った。

「お前誰?」

「俺か?俺はジュウだ。出来の良い鳥型ロボットさ。」

「じゃー、何しに来た?」

「てめえを説得に来た。マフィアのな!」

「何で!?!」

「実はこの家の近くに、マフィアのグループがいてな、そいつらを追い払う為に今、マフィア希望者を集めている。そいつらは、いつかこの町を乗っ取る気だぜ!」

「でもマフィアって殺し合いするんだろ?死んだらどうするんだよ!」

「俺に、マフィアになる!って言えば、寿命以外では死なない魔法をかけてやる。痛みは、感じるけどな!」

「そういうことか……。わかった!マフィアに入ってやるよ!」

「おう!じゃー、お前ボスな!」

「はっ!?!」

「部下に命令出来て良いじゃね〜か!」

「そうか……。」

「だが、いばるためには、部下が必要だ!だから早速、部下集めといきたいところだが……。」

「いききたいところだが何だよ!」「てめえ、武器持ってねえだろ!

「そーゆーことで、武器を用意した。ソード・オブ・ダイアルだ」と、ジユウは、穴の開いた固いホースのような棒をわたした。穴の中にボタンのような物がついている。

「何だよ！これ！」

「穴のボタンを押してみろ！」ポチ！勇希はボタンを押してみた。スチャン！なんと、ボタンがついている穴の反対側の穴から剣が出てきたではないか！

「そーゆー武器か」

「ああ、そうだ！武器も手に入れたことだし、明日から部下探しだ！目標まずは7人！」

「OK！」

次の日。

「今この近くにマフィアが住んでるらしいぞ！」

「は！？」

「サイキック・アタッカーってあだなでな、たまに海岸で修行してるらしいぞ！お前、今日から夏休みだろ？」

「ああ」

「今から行くぞ！」

「え！？なんで！？」

「早い方が良いじゃん」

「そんな理由かよ・・・」

海岸。

「ここだな！」ドカーン！

「！！？」勇希とジユウは、すぐ音のなった方を見た。すると、そこにいたのは、女子。

「あいつだな！」

Legend・2 VS・キャサリン・ドウ・リッセ

女は腕を動かすだけで近くの岩を割ってみせた。岩は真つ二つにドンドン割れていく。これで10こめだ。

「あれは、超能力か！」

「ああ。キャサリン・ドウ・リッセは超能力と幻術を操る術士だ。」
キャサリンはこつちを睨んだ。その目には、炎のような物が宿っている。

「あれは、炎か？」

「いや、『勇気の涙』だ。マフィアは

全員宿っている。人体に宿るもの、武器に宿るもの、それぞれだ。

そして、マフィアの掟として、フリーのマフィアで負けたものは勝ったものの下につく。」
「つまり、勝てば部下ゲ

ツトつてわけだ。」
「そだな！てめーにも勇気の涙は宿っ

ているはずだ。勝てるかもな。」
そう言うとキャサリンがこつちに向かって来た。

「勇希、体に力を入れろ！勇気の涙が出た所がお前の武器だ。出なかつたら、ソード・オブ・ダイアルを使い！」

おう！」
勇希は、体に力を入れた。

そして、手が湿ったと思うと、オーラのような物が出てきた。わずかに電気を帯びている。

「宇宙の涙だな。よし、戦え。マフィアの戦いにルールは無い。お前の思うようにやれ！」
「分かった」

勇希は手に力を入れ、キャサリンに向かつて行った。

勇希の足は県大会クラスで戦闘では役に立ちそうだ。

しかし、足が速い分、スタミナは低めだ。つまり、短期決戦に強い。
「オラアアア！」
勇気の涙で威力の増した勇希のパン

チがキャサリンの腹に命中。

上級のマフィアもひとたまりもない一撃だ。

「ぐっ……」
「どうだー！」

キャサリンが呟く。

「まだだ・・・」
そして、キャサリンの勇気の涙が強くなり、手に丸い光の球が現れる。

「サイキックス！」
光の球は勇希に向かって飛んできた。

勇希はそれを瞬時に避ける。

ジュウが呟く。

「魔法弾か・・・」
「そうらしい」
「いや、」
キャサリンが割って入る。

「これは、ビー玉に魔力と勇気の涙を投入した。普通の魔法弾ではない」ジュウが叫ぶ。

「なぜ、教える!？」
「普通の魔法弾と一緒にされたくないからね」
勇希がパンチの構えをする。

「続きをやるっ」
「望むところだ!」

サイキックス。ビー玉に魔力と勇気の涙を投入した、キャサリンの必殺技。あの技をくらわなければ勝機はある。

「サイキックス！」 来た。

また瞬時に避ける。

キャサリンは、必殺技と魔法などの技は強力だが、ステータスは低いらしい。

「勇希！術士は打撃に弱い。打撃技で攻めまくれば勝てるぞ！」

「わかった！」

もう一度キャサリ

ンに接近し、肩にパンチ。

それから後ろに回り込み、背中にパンチ。

するとキャサリンがのけぞった。

「今だ！最大級の力を込めてパンチだ！」

ジュウの言

うとおり、勇希は最大級の力を込めてパンチをした。

すると、手から電流が流れ、キャサリンにさらなるダメージを与える。

キャサリンは倒れてしまう。

「これは・・・」

「それは、パンチに加え電気でダメ

ージを与える、てめえの必殺技第1号だ。その名も『ハッスル・オ

ブ・サンダー』」

「そうなんだ・・・」

「ま、それは

ともあれ、これでキャサリンはてめえの部下になるだろうよ。起きたらな！」

「そうだな」

キャサリンは目を覚まし

た。そこは見慣れない場所。自分の知らない場所だ。寝ていた場所は床にしかれた布団。家の中か……。なぜ、ココにいるのか。思

い出せない。

「起きたか」

声のする方を見ると見慣れた鳥

型ロボットがいた。

「

君は・・・？」

「オレはジュウって言うんだ。」

「・・・」

話がある。勇希が来るまで待つてろ！」

「勇希？誰の

こと？」

「てめえを倒した、サンダー野郎だ。」

「！！思い出した。勇希との勝負に負け、気を失った。それから、この家に運ばれたのか。」

「お！来たか」

「ああ。お、キャサリン起きたのか！」

勇希は近くに置いてあつた椅子に座る。

「じゃー、話す。大事な話だ。良く聞け！」

うん」

キャサリンが頷く。

「実はバスラーファミリーという、マフィアから黒木勇希をマフィアにし、例のこの町を乗っ取るうと言うマフィアグループ、ファイタンファミリーを壊滅させると言う依頼を受けた。」

「つて、何でオレなんだよ！」

「勇希はそのバスラーファミリーの血を受け継いだ次期ボス候補なんだ。さらに他のボス候補より戦闘センスが高めだからだ」

「そうだったんだ。」

「そして、

バスラーファミリーに代々伝わる勇気の腕輪。宇宙、自、炎、町、海、空、地と言う種類がある。全部で7つ。これに比例し、幹部も7人だ。ちなみに、勇希は宇宙、キャサリンは町の腕輪がふさわしい」

「そうか。で、次はどの種類の奴を

探せばいいんだ？」

「攻撃型の

地か炎だ」

「誰か良い奴いるか？」

「いるぜ！炎の腕輪にふさわしい奴。名をファクロン・スペル！」

Legend・4 ファクロン・スペル

ファクロン・スペル。

アイツは実力のあるものはすぐに認めるとう性格のマフィアだ。そして、この町の外れに位置する焼け野原にいる可能性がある。

「て、ジユウは言ってたよな？」

うん。でも、何でジユウは来ないの？」

格なんじゃねえの？」

「あーゆー性格
「そうだね。!?」

いきなり目の前に炎の塊が飛んできた。炎の塊が飛んできた方向を見ると赤髪で少し背の高い男がいた。左肩にトゲのような物がついている。

そして、トゲと手に勇気の涙。

少し炎が混ざっている。

「炎が混じった勇気の涙か」

「やつぱ、炎使うんだね」

ファクロンは話し声が聞こえたのか、こっちを睨み近づいて来た。そしていきなり話しかけてきた。「あんた、その腕輪。バツスラーファミリーの物だな？」

「え・・・」

う、うん」

「部下にしてくれ！」 「へ？」

「部下にしると言っている。それとも戦うか？」

「いえ。分かりました。でも、なんで？」 「バツスラ

ーファミリーと言ったら10代も続いている、有名なファミリーだ。バツスラーに憧れ、マフィアになる奴もたくさんいる。オレもその中の1人って訳だ！」 「そんなに有名だったんだ・・・」

「私も知らなかった・・・」

「まさか、戦わずして部下になるとはな」

「ジユウ！」 「ま、とりあえず帰る

ぞ。炎の部下出来たしな」

「ファクロンは炎つと」

「ありがてえぜ。戦わずして部下になれるなんてよ」

「オレもちよつと良かったよ」

「あ！言い忘れてたけど、敵を部下が倒した場合、敵は部下の部下になるからな。つまり、キャサリンが敵を倒したら、その敵はキャサリンの部下であつて勇希の部下とは言えないと言つことだ。あと、金が貯まりしだい地下アジトを造る」

「地下アジト!？」「ああ。バツスラーの知り合いに頼んでな。次期ボス候補の命令なら安いかもな」

ファクロンのテンションが上がる。

「オレはそれに賛成だぜ、ボスさん」

私もかな」

「2人がそう言うならオレもいいよ」

「決まりだな。」

「じゃー、」

ボスさん！次の部下を見つけましょう！」「ジユウ!」「ああ、次は地。ルームニアス・ジエドって言う奴がふさわしい。この近くの草原にいる可能性が高い」

「よ」

し！次はそいつだ。明日にでも行こうぜボスさん!」

「ああ」

次の日。勇希、キャサリン、ファクロンはジユウの言っていた草原に来ていた。草原は学校のグラウンドよりも遥かに広い。そのど真ん中で、2人の男が戦っていた。1人は身長190〜200センチの大型の男だ。勇気の涙をともした太い腕で見た目からパワー型と思われる。

もう1人は身長はそれほどないが、勇気の涙をともした手裏剣を持っている。足が長く、スピード型と思われる。「ボスさん、どっちがルームニアスだ？」

「さあな。だがヤバいぜ！ルームニアスが倒れたらあのどちらかの部下になっちまう」

「私、分かった」

「本当か？キャサリン」

「うん。あの手裏剣持つてる方、私の家の近所に住んでたブーメラスって人」

「じゃー、デカいのがルームニアスか」

「そうらしいぜ！ボスさん！」

「うん」勇希は走ってルームニアスの方に向かい、パンチを繰り出す。

「ハッスル・オブ・サンダー！」

ルームニアスはすぐさま防御の体制に入る。勇気の涙も強まった。ハッスル・オブ・サンダーは命中し

たがダメージはあまりないようだ。勇希がもう一発、ハッスル・オブ・サンダーを放とうとした瞬間、勇希の足元に手裏剣が飛んできた。ブーメラスは予備の手裏剣を構え、言った。

「そいつはオレの獲物だ！奪いたいならオレを倒してからにしろ！」

ルームニアスが呟く。「オレも強い奴とやりてえ。戦

つて勝った奴とやってやるうか」

「OK！」

「じゃ、オレはあんたのお仲間の所らへんで見とこ！」

「ブーメラス

だったけ？名前の通り、ブーメランとかの飛び道具を使うらしいな」

「オレの見るかぎりあんたは近距離を重視しているな。遠距離と近

距離では戦い方によって有利になったりする」

「ああ、そだな！」

勇希はブーメラスに走って接近する。飛び道具は近距離に弱い。だから近距離戦に持ち込んだ方が有利に戦える。

ルームニアスはキャサリンとファクロンのいる所に座っていた。ルームニアスはファクロンに聞いてみる。「あのガキはあんたらのボスかい？」

「ああ。オレ達のボスにしてバツスラーファミリー10代目候補だ」

「バツスラーだと！？マジかよ・・・」

「マジなんだよ！で、あんたが地の腕輪を持つにふさわしいらしいんで、倒しに来たわけだ」

「おい！それを早く言えよ。バツスラーファミリー入りてえぜ。ついでにブーメラスって奴も入れようぜ。奴は空の腕輪にピッタリっぽいからな！」

「ああ。だがボスが勝てばな」

ブーメラスはすぐに勇希から離れようとする。だが離れきれずパンチをくらう。これで2発目だ。体力も激しく消耗する。

「フン！近距離にもちこみ、少しずつ体力を削るのか！」

「この戦いの方がいいとおもってね」

「だが武器を持たない」

「持つてるよ。剣をね」勇希は背中につけていたソード・オブ・ダイアルを構える。ボタンを押し、剣を出す。

「なに！？」

スチャーン！ブーメラスを斬りつける。しかし、斬りつけたのは手裏剣。そしてブーメラスがいない！？

すると後ろからキック

をくらう。ブーメラスのキックだった。

Legend・6 決着！ブーメラス そして海へ

勇希は少しよろめいた。

それもそのはず、背中に背後からのキックをくらったのだから。

キックの後、ブーメラスは前に回り込み、2度目のキックをくらわせようとした。

勇希は負けると思った。

そのとき、ブーメラスのキックが止まった。

何が起こった？前を見る。

確かに止まっている。

ブーメラスが驚く。

「なぜだ！なぜ動かない！」

「当たり前！」 キックが止まった原因。

それはキャサリンだった。

キャサリンが超能力でブーメラスの動きを止めていた。

「ボスさん！キャサリンがやったのはサポートだ！倒せばボスさん

の部下だぜ！」

「よし！」

ソード・オブ・ダイアルを持つ手に力を入れる。

ボタンを押し、剣をしまう。そして、ソード・オブ・ダイアルに勇気の涙がとれる。

「サンダー・オブ・ソードネス」ブーメラスは倒れる。勇希の勝ちだ。ルームニアスとファクロンはガッツポーズをする。

「何でルームニアスまでガッツポーズしてんの？」

ファクロンが説明する。

「今な、バツスラーファミリーって言ったら入りたいてい出してな。ちなみにブーメラスもバツスラーに入れる。」 「ジユウに報告するか！」

「その必要は無い！」 ジユウは近くの大樹の上にいる。その大樹の下に長い濃い青の髪をした少女が立っていた。

両手で棒を持っている。

「こいつはウオスヘイロスと言ってな。棒を使って戦う。珍しい奴だ」 「どこが珍しいんだよ！普通の女子じゃん！」 「元気の涙と言ってな。勇気の涙の上をいく強力な涙だ。海の涙で防御型だがな」

「元気の涙だと!？」 「ああ」 「だけど、これで6人そろつ

たからあと1人だ」 「ブーメラスが空、ルームニアスが地、ウオスが海だ。つまりあとは自。ブーメラスを家に運んで探す。出来れば今日中にな」 「候補はいる

のか？」 「レジエダリー・ゴスクと言う弓矢使いがいるが・・・

「いるが？」

「どこにいるかまでは分からない。この町にいるはずだがな」

「分かった。探そう」 「ルームニアスはブーメ

ラスを運んでくれ」 「おうよ！」 ジ

ユウは小さく呟く。 「今日中に探し出せれば明日には敵アジト

に乗り込める」

Legend・7 VS・レジエダリー・ゴスク

その日の午後。

レジエダリー・ゴスクの搜索を始めた。

あと1人でこの町に平和が戻る。

勇希は森林の中を探し回っている。

ピリリリリリリ・・・！勇希の携帯がなる。

ジユウが家から電話したらしい。

「もしもし、何だ？」

「お前がいる森林になんか強い勇希の涙を確認した。そこを探し回れば見つかるはずだ！」

「分かった」

もうすぐ見つかる。そう確信した。

それもそのはず、気配がする。

誰かに見られているような・・・。

シュツ！弓矢が飛んでくる。

勇希は瞬時に避ける。

「さすがは次期バツスラーだ」

木々の影から出てきたのは、背が高く、長い黒髪をした男。細い目

でこちらを睨んでいる。

「てめえがレジエダリー・ゴ

スクか？」

「ああ、そうだ」

「戦い

たいものだな！」

「オレもだ」そう言うと、3本の弓矢を同時に打ってくる。勇希は

また避ける。そして、手から電気を一気に放出してみる。

「BE・A・THUNDER」

レジエダリー

の肩にかする。かすっただけなのでかすり傷ですんだらしい。レジ

エダリーは弓矢を持って接近してきた。弓矢を剣のように使っ

た。勇希は力をためた。

「ハッスル・オブ・サンダー」

レジエダリーの腹に命中。レジエダリーはよろめいたがすぐに体制

を立て直し、弓矢で斬りつけてくる。早い！

そして、弓矢を左側にパンチを右側に繰り出す。避けきれない。

どちらかには当たらないといけない。勇希はパンチの方に当たった。レジェダリーは遠・近両方とも出来るらしい。レジェダリーはさっきのパンチに続き、もう1発パンチをくらわす。流れるような攻撃。ついに勇希は倒れてしまった。レジェダリーは勇希の側に座り込んで、言った。

「バツスラーファミリーに入ってやってもいいぜ！」

「何!?!」

ただし条件がある」 「条件?何だ?」 「オレがボ

スの右腕。そしてボス補佐だ」 ジュウの声がした。

「いいんじゃないの?これで自の奴がそろっとならな」

ジュウは木の上にいた。勇希は眩

いた。 「分かった!」

ぼそつと言った。 ジュウは 「明

日だな」

次の日。ファイタンファミリーアジトに乗り込む日。ジユウが乗り込みの説明をする。バスラーファミリーからの情報を元に考えたらしい。

「まず、この近くの隠し出入り口からアジトに侵入。廊下に出る。そこを真っ直ぐ行くと絵が飾ってある。それを破るとどこかに穴があき、そのおくにファイタンファミリーボス、ノブナガ・オブ・オダースがいるらしい！」

「単純だな」「単純だが難しいミッションだ。気いぬくなよ」

「ああ」

勇希の家の近く。何年も前からある空き家。その家の中からファイタンアジトに入れるらしい。

「行くぞ」

勇希から入る。中は何も無い。だが床に不自然に色がちがう所がある。そこを叩くと穴があいた。その穴は地下へと続いている。

「ここだな」

1人ずつ穴に入り、廊下を歩く。するとジユウの言う通り絵が飾ってある。

「にしてもボスさん！ファミリーにしては人がいねえぜ！」

レジェダリーが言い返す。

「ファイタンファミリーは昼間に活動するマファイアだ。だから昼間は人がアジトにはいない。」

勇希は絵にパンチする。

絵が破れ、廊下の突き当たり穴があく。勇希達はその穴のおくに進む。

すると、上から針金が飛んでくる。

「ダレダ!？」

「バスラーファミリーのものだ。」

あんたを倒しに来た！」

「オレヲ、タオ」

スタト?オモシロイ。タタカッテヤル」

いきなり電気がついた。前に立っていたのは、目を仮面で隠した短い黒髪の男。鎧を着ており、槍を持っている。見た目は立派な武士だ。「イクゾー！」オダースは手に持っていた5体の灰色の人形を床に置く。すると人形が動き出した。

「人形と槍を操るのか」人形が襲って来る。オダースは椅子に座っている。勇希は人形の攻撃を避け、オダースに近づく。そして、オダースにハッスル・オブ・サンダーをくらわせた。だが・・・
「効かない!？」
「ソナモノガ、キクワケネエダロ!」
ルームニアスが人形を1体倒し、オダースにパンチする。

やはり効かない。
ルームニアスと言う。 「ボス、こいつには何か弱点があるはずだ。そいつを見つけない限り勝てないと思うぜ」
「ああ、そうらしい」 だが弱点

とは何だ？人形か？仮面か？分からない。だが見つけなければならぬ。オダースを倒さなければ。平和を守るために。

タランタス、サメのスクアロン、ネズミのラットルス、ラクダのエスクダースだ」

「これで勝てるのか？」

「多分な。よし！早速、合体だ。勇希、オレ達にフュージョンボールを投げる。このボールだ」 ジュウが渡したのは黒く、灰色の

線がはいった野球ボールくらいのボールだった。それをビーストセツテ達に投げる。 カッ！！！！一瞬の光とともに巨大ロボットの

姿が見える。 「合殺魔神スターセツテ！」

Legend・10 オダース完結！ カードとアジト

合殺魔神スターセツテ。ビーストセツテ7体が合体した究極のロボ
ット。

「ボスさん、これでオダースの奴を倒せそうですね」

「うん」

スターセツテは呟く。

「瞬殺する」

「瞬

殺かよ！？」

「だが、いけるかもよボスさん」

「オ

「えっ？」

ダースの奴、麻痺してる。今なら動けないはずだ」

「そうか」

スターセツテは左手のハズー

力をオダースにむけた。

ド

カンツツツ！！

オダースは目を閉じる。カツツツ！！

まばゆい光が顔に当たる。思わず目を閉じて
しまつほどの光だった。目を開けるとオダースが消えた。

スターセツテが言う。「消滅し

たな」「消滅したの！？」

「オダースは実は霊だ。強力な

光に当たると消滅する」

「じゃ

ー、今のただ光っただけ！？」

「うん、そな

の」「つまり霊に毒や光は効くけど、打撃は効かない
の！？」「いや、光しか効かねー。

毒は鎧を溶かしたから効いたように見えたんだ。麻痺も鎧が動か
なくなつたから、本体も動けなかつたんだ」「そうなんだ・・・」

「あと、バツスラーの武器研究会の奴が新しい武器を開発したら
しくてな」「バツスラ

ーに武器研究会とかあんのかよ！？」

「ああ。ちなみに武器の名はマフィアカード。カードに封印され
た力を使うことが出来る」「すごいっばい」

「使い方は腕輪に四角い穴が空いてるだろ？そこにカードをはめ

る。するとカードに封印された力が使える。で、カードにはタイプがあつて攻撃タイプ、防御タイプ、ステータス変化タイプ、フィールドタイプ、武器タイプ、状態タイプ、生き物タイプがある。ちなみにマフィアカードは多くのマフィアに腕輪とセットで売られていゝる。おかげでバツスラーはガツポリもつかつてゐるぜ」

「売つたの!? しかも、ガツポリ!？」

「あと、

勇希の家の地下にアジトが完成した」 「アジトって早すぎない!? アジト造るつて言つてたつたの1日程度しかたつてないんだぞ!」 「いや、1年前に造りだした」

「なんだつて!? でもたしかに夜に変な音が聞こえたりしてたよな」 「それだ!! 多分工事の音。朝までには見た目はもとに戻したから分かんなかったはずだ」 「そうなんだ」

「それより、帰るぞ。アジトでカードとかの説明してやる」「うん」

Legend・11 マフィアカード

バススラーアジト。 「広えな。アジトって」

「ああ。地下1階が練習場、地下2階が生活室、地下3階が人工の大自然、地下4階が特別室だ」 「で、今どこに行こうとしてるんだ？」 「地下2階の床の間だ」 「アジトに床の間!？」

「生活室だから普通の家っぽくしてあるんだ」 「そうなんだ・

・」 「ついたぞ」

そこは普通の家の床の

間にちかい造りになっている。 「本当に床の間だ」 「座れ。

全員にマフィアカードをやる」 「あのすげえカード?

」

「ああ。勇希、お前はローラーズサンダルとサンダービースターのカードだ。マフィア歴が短いから2枚だ。で、ファクロンはファイアーストーム、キャサリンは増殖、ルームニアスは大地盛り、ブーメラスは神国の空、ウォスはブリザード・スライサー、レジエダリはリーフウィングだ」 「見た目は普通のカードだな」 「ああ。話は変わるが今度、隣町の地下施設でファミリー対抗のマフィアカップが行われる」

「ファミリー対抗!？」

「ボスが戦い、決勝戦ではファミリー全員で戦う。つまり決勝戦までするのはボスだけだ。どーだ、やるか？」

「うん。今、自分の力を試してみたいところだしな」

「マフィアカップは明後日だ。ということで明日はカード使いの修行だ」

「修行か・・・」 「よし、ブーメラス、カードを使っ

てみる」 「ああ。腕輪にカードをはめるんだな」

ブーメラスは腕輪にカードをはめた。すると部屋が空になった。 「なんだ、これ!？」 「カードの効果

だ。ブーメラスの神国の空はフィールドを変化させる」　ブーメラスがカードを外すと部屋は元に戻る。　「もしかしてオレのカードも・・・」　「いや、お前のは武器タイプと生き物タイプのカードだ」

「武器は分かるけど、生き物って何!?」　「命を持つ生物だ。生物も動くから複数で戦えるってわけだ」　「すごい・・・」

「だから、変な時にだすと部屋が壊れたりする」　「つまり、戦い以外には使わない方がいいの!?!」

「ああ、そうだ。フィールドタイプは壊れる可能性が低いかな」　「だから、ブーメラスにさせたのか」

「そうだ。じゃー、明日、修行開始だぞ!!」

Legend・12 修行

次の日。地下1階、練習場。

「よし、では今からマファイアカードを使いこなすための修行を行う」
「うん」 「ではまず、」

サンダービースターを出せ。複数攻撃はいろいろな場面で役に立つからな」
勇希は腕輪にサンダービースターのカー

ドをはめる。すると羽の生えたトカゲのような生き物が現れる。「それがサンダービースター。生き物タイプのカードは使い手になつくと言われている。つまり、可愛がればそれだけ指示を聞きやすくなったり、一緒に修行すれば強くなったりもする」

「つまり、信頼関係か」

「そーゆーことだ。あとローラーズサンダルもだせ。サンダービースターのカードに重ねればだせる」

ローラーズサンダルのカードをサンダービースターのカードの上に重ねる。すると、ジェットエンジンのようなものがついたサンダルが現れる。

「それをはけ。ローラーズサンダルはジェットで高速移動や空中浮遊を可能としたサンダルだ」 勇希はローラーズサンダルをはい

た。
「装備したカードは自分の思うがままに動く。簡単に言えば、体の一部になったようなもんだ」 「やっ

ぱ、すげえな」 ローラーズサンダルは勇希の思うように動く。高速移動する、浮遊する、止まる。全ての動きが思うがままだ。

「あと、サンダービースターを手名付ければマファイアカード2枚マスターだ！」

「このトカゲか……。手名付けるなら名前くらい決めた方がいいか？」

「そーだな。名前を付けた方が愛嬌がわくからな」

「トプラスでどーだ？」

「まーまーだな」

「まーまーかよー!!」 「まあ、後は

自分でなんとかしろ!手名付けるくらい1人で出来るだろ」 「う

ん、分かったよ」 ジュウは練習場を出ていく。練習場は勇希と

トプラス、2人になった。 「じゃー、トプラス!修行だ!と

にかくオレの攻撃を避ける!」 勇希はトプラスに

パンチする。トプラスは素早くかわす。

「はええな」

2人の修行は5時間にも及

んだ。勇希が攻撃し、トプラスが避ける。これの繰り返し。明日の

マフィアカップ、目指すは優勝!!勇希の実力を試す時が刻一刻と

迫っていた。

Legend・13 マフィアカップ開催！

マフィアカップ当日。

抽選の結果、勇希の初戦は2試合目だ。

「それでは1試合目を始めます。エイトファミリーのエイト選手とジッパーファミリーの山上選手はフィールドへきてください！」

2人の選手がフィールドにきた。

エイトは小柄なイタリア人、山上は大柄な日本人だ。

「では、試合開始！」 山上は大きな体でエイトに襲いかかる。

エイトは素早くかわす。その時、山上がカードを使う。「T・ダイナマイト」 3つのダイナマイトが現れ、エイトに向かう。エイトはよけたが、ダイナマイトは曲がって襲ってくる。

背中当たり、エイトは倒れ込む。そこに

山上は足で踏み潰す。

「WINNER！山上」

1試合目はジッパーファミリー、山上の勝利。

次はオレか」

勇希はフィールドに向かう。「バツ

スラーファミリーの勇希とマラスファミリーのジャックはフィールドへきてください！」 対戦相手のジャックは髪の毛の長い男だった。

切れ目でナイフを持っている。ナイフ使いか……。 「試合開始！」 勇希はカードを2枚重ね、トプラスとロー

ラーズサンダルを出す。高速移動し、相手の後ろに回り込む。

「ハッスル・オブ・サンダー」ジャ

ックは倒れ込む。

トプラスはジャックの頭に体当たりする。

「WINNER！勇希」

「骨のない奴だ」

次は2回戦。

マフィアカップは10ファミリー参加の大会だ。

2試合目だったからあと3回勝てばいい。

3試合目はアナシスファミリーのハーンが勝利。4試合目はタイア

ントファミリーのキャラクターが勝利。

5試合目はネパールファミリーのネスが勝利。そして、2回戦1試合目。

「ジッパーフファミリーの山上とバツスラーファミリーの勇希はフィールドにきてください！」
山上も勇希も1回戦は一瞬で敵を倒した。

「試合開始！」
山上はカードを発動。

レイソードと言われる剣を出す。

勇希もトプラスとローラーズサンダルを出し、ソード・オブ・ダイアルを構える。
山上がレイソードを振り回す。勇

希はそれをソード・オブ・ダイアルで受け止め、トプラスが攻撃する。続いて、勇希が電流を流す。山上は倒れた。
「WIN

ER！勇希」
勝った。あと2回だ。
勇希は

次の試合も勝った。そして決勝。
「バツスラーフ

ファミリーVSネパールファミリー、試合開始！」

Legend・14 マファイアカップ優勝!

決勝。ネパールファミリーと7対7の対決。フィールドは広く、学校のグラウンドくらいある。 ファクロンは呟く。

「ネパールファミリーは海外では名の知れたファミリーだ」

ルームニアスが続ける。

「戦闘能力がものすごいからな。とりあえず、遠距離型と近距離型に分かれて戦った方が確実だぜ」

「確かに……。じゃー、ウオス、キャサリン、レジエダリー、ブーメラスが遠距離から。」

ルームニアス、ファクロン、オレが近距離から攻撃だ」ネパールファミリーのネスが叫ぶ。 「作戦会議が終わったならと

つととこい！」 ネパールファミリーは全員、小柄な人達だ。

「では、いきますか」 勇希、ファクロン、ルームニアスは敵に向かう。他の4人は武器を構える。「ハッスル・オブ・サ
ンダー!!!」ネスは手で受け止める。

少しはダメージがあったはずだ。

次はオレだ。サイコブースト!

勇希が

少しよろめき、ネスが油断した時レジエダリーが弓矢を飛ばす。

ネスの胸に当たり、ネスが倒れる。

「ボスーーーー!!!」 ネスの部下が駆け寄る。かなりの忠誠心らしい。

「WINER! バッスラーファミリー! よって優勝はバッスラーファミリー!」

「よし!」 「優勝賞金100万円と特別

限定マファイアカード、『大宇宙』ギヤラクシー・アース』です」

「まで……。まで!」 までの声をあげたのはネスだった。弓矢をぬき、包帯を巻いている。 「カードを……。よ

こせ。カードはオレの……。だ……」

ネスはフラフラしている。今にも倒れそうだ。 戦いを終えたマ
フィア達がブーイングする。 「ネス！きたねえぞ！」

「てめえ、負けただろ」

「ずりいぞ」

「マフィアカードはバツスラー

のもんだ」

ブーイングにまぎれ、低く大きな声が轟く。

「確かにな！」

ネスが呟く。

「お父様・・・」

なんと、低く大きな声を

あげた、白髪で背の高い男はネスの父だった。

「次期バツスラ

ーよ、私はネスの父。そして、ネパール5代目のネザースと言うも
のです。この度は息子のネスがすみません。優勝はあなたです」

「はあ・・・」

ジュウはどこから来たのか、勇希

の頭に止まった。

「ま、

これで優勝だ。カード使いも良くなってきたしな」

「ジュウ！」ネザースは驚く。

「ビー

ストセットですか・・・？」

「ああ、そ

うだぞ、ネザース！」

「ジュウ、何

でこの人の名前知ってたんだ？」

「ネパールはバツスラーの

同盟ファミリーでな」

「でも、あの人はビーストセットって驚いてたけど」「ビーストセ
ツテがバツスラーにいるのを知っているのはバツスラーファミリー
とオビライトファミリーくらいだ」「へ〜」だが、これでマフィア
カップは優勝。

ジュウは呟く。

「今度はあれを見せるかな・・・」

Legend・15 ジュウからのミッション

バスラーアジト。勇希は話があるとジュウに呼び出された。床の間に入り、座る。

「来たか！」

「話ってなんだよ！」

「ああ、ミッションだ」

「ミッション？」

「そうだ。この町に十文寺って寺があるだろ？」

「うん」

「その地下は十文機平つ

て言っつてな、ビーストセツテが作られた所だ」

「ビーストセツテって日本産なの！？」

「ああ。で、そこで研究しているMr・ロトロがな、新しいロボ『ジュラシククトウリニ』つ

てのとジュラシククトウリニとビーストセツテを合体させる『十文機平混融球』つてのを作つたらしい」

「で、それをどうするの？」

「部下2人だけつれてから、もらつてきてくれ」

「2人！？」

「ロトロは機密を守るために

少人数じゃないと中に入れなからな」

「そうなんだ・・・」

「そういう事ならオレはどうです？」

ファク

ロンが入ってくる。いつもより元気だ。

「じゃー、1人はファ

クロンな。あと1人はレジエダリーとかでいいんじゃないか？」

「でもレジエダリーはどこにいるんだ？」

「地下1階の練習場じゃないっすかねえ？奴は毎日のトレ

ーニングは欠かさないからな」

「レジエダリーは

いないよ」

「ウオスが入って来る。」

「どう言う事だ？」

「祖父の命日だから墓参りだつてさ」

「となるとレジエダリーはダメか・・・」

「何かあるの？」

「ミッションでね。部下

2人連れて行くことになって、あと1人はレジエダリーと思っただけだ、ダメだね」

「私が行こうか？」

「へ・・・？」

「ファミリーに入ってからまだあまり役に立ってないから」「決まりだな」

「ああ、そうだな。で、ジユウ、いつまでにクリアすればいいんだ？」

「時間制限は無しだ。とってく

ればいいからな」

「そうか。じゃー、明日にでも行くか！」

「そうだね」

「いつ敵に襲われるか分からない。戦闘準備

はちゃんとしとけよ」

「分かってるよ」

「あと、ロト口は白髪で白髭でメガネのジジイだからな。そいつにあつたら『ジユウの命令でジュラシククトウリニと十文機平混融球をとりに来ました』って言えばいい」

「命令かよ」

「ま、今日はゆっくり休む事だ

な」

ジュラシククトウリニとは何か、勇

希は早く知りたくなった。

Legend・15 ジュウからのミッション(後書き)

キャラクター紹介1 1・黒木勇希(男)(14) バッスラーフ
アミリー10代目。雷を操り、敵を倒す。普通の中学生で、町の平
和のため、ファイタンファミリーのオダースと戦う、マフィアカツ
プ優勝者。

2・ジュウ(男)(年齢不明)
ビーストセツテの1体で鳥の形をしている。素早い攻撃と防御力が
武器。ビーストセツテのリーダー的存在らしい。 3・キャサリ
ン・ドウ・リッセ(女)(14) バッスラーフ7人衆の1人。超能力
を使い、戦う。戦いでは主にサポート役に回ることが多い。

4・ファクロン・スペル(男)(17) バッス
ラーフ人衆の1人。勇気の涙に炎が混ざっており、高い攻撃力を誇
る。常に攻撃の軸になって戦う。

次の日。十文寺前。 「入るぞ！」 寺

に入る。中には白髪の老人が立っている。髭がはえていないので口
ト口ではない。老人の後ろには地下への階段。 「なん

じゃ？お前達」 「この寺の地下に行きたい。通してくれ」

「地下？ああ、ロト口の所か！」

「そうだ。ロト口に会いに来たんだ」

「会っただけなら通れ。ただし、ロト口を殺したりしたらお前らの命
はないと思え！」 「分かった」

ダッツツッ！！3人は駆け出した。

「元気だな。次期バスラーよ」

老人はほつきを持って寺から出て行った。 勇

希達は寺の地下に続く廊下を真っ直ぐに進む。曲がる場所がない真
っ直ぐな廊下。 そして、廊下の端にドア

があった。

そこを開ける。

中には、白髪に白髭、メガネの老人。

さらに恐竜型ロボットが3体とフュージョンボール？

「よく来たな！レゴーが通したと言うことはマフィアか
？」 「ああ、そうだ。あの人、マフィア

しか通さないんだな」 「で、何の用

じゃ？」 「ジュウがな、ジュラシクトゥリニと十文機平混融

球が欲しいってさ」

「ジュウが！？ということではめえ、次期バスラーだな」

「そうだ！」 「今、届け

ようとしてたんじゃ。ジュラシクトゥリニと十文機平混融球をな」

「本当？なら話は早いや。とっ

ととミッシェン終わらせたいから早くちょうだい！！」

「いいぞ！ビーストセットとジュラシククトウリニを保存できるメモリーカード。ビーストセットとジュラシククトウリニを持ち運びする道具だ。」

これに保存していけ！」恐竜がメモリーカードに吸い込まれる。

「じゃー、帰れ！ジュウは意外とイライラする。早くしないと殺されるぞ」

「ああ、そう

する」 勇希達はドアを開け、廊下を歩いていった。

「簡単に終わらせやがってよ〜！」

ジ

ユウがロトロの肩に止まる。「ジュウ、いたのか！」

「オレを作った奴が気づかないでどーすんだよ」

「ま、いーじやる。だが次期バツスラーは若いのお〜」

「ジジイみたいなこと言うなジジイ！」

「意味、分からんぞ！だが、何の為にここに来た？」

理由があるじゃろ」 「ああ。お前、バツスラーアジトに来ねえか？」

「ほう。アジトが出来たか！」

「いろいろあるから、今度、遊びにでも来い」

「いいぞ」

そう言うとジュウは飛んで行

った。

Legend・16 十文機平（後書き）

キャラクター紹介2

5・レジエダリー・ゴスク（男）（

19）次期バツスラーの右腕にしてボス補佐。仕事が早く、弓矢を使って戦う。遠距離、近距離とバランス的に戦えるのが魅力。

6・ウオスヘイロス（女）（13）バツスラー7

人衆の1人。棒で戦う。今はマフィアカードのブリザード・スライサーというカマを棒に取り付けて戦っている。

7・ブーメラス（男）（17）バツスラー7人衆の1人。手

裏剣をメインウェポンにしてサブウェポンにブーメランやダイナマイトを持つなど遠距離戦でかなり役立つ。素早さも高い。

バススラーアジト。

ジユウは勇希達を追い越し、先に帰ったらしい。

「おお！おせえぞ！」 「結構、早いと思うけど……」

「じゃー、次のミッションを発表する」

「いきなり!?!」 「この町の相川壮一

という奴を殺せ！」 「相川……?」

「ああ。これは試練でもある。お前1人とビーストセット、ジユ

ラシックトウリニだけで行く！」

「えつつつ!?!」 「この試練を乗り越えた時、お前は

立派なボスだ！」 「そういうこと

なら頑張れよ！ボスさん」 「つて、試練を乗り越えた

らオレが10代目!?!」

「9代目が死んだらな」 「でも、しょうがないか……。血がつ

ながってるんだから」 「たしかにしょうがな

い事だ。んじゃ、行くか」

「今からかよ!?!」 「お前はオダースやネスを倒したんだ。成長は

相当したはずだぞ！」 「たしかにそうだけど」

「とつとと行くぞ」 「その前にさあ、相川壮一って誰？」

「ファイタンファミリーを継ぐ男だ！」

「オダースの後継ぎ？」

「そうだ。早く殺さないとまた町がヤバいからな！」

「なら早く行こう！」 「ああ。その

つもりだ」

「その必要はない」いきなり聞いたことのない声が響く。

床の間の入り口に人がいた。

黒髭をはやし、剣を持っている。

「誰だ!?!」 「ファイタンファミリー5代目、

相川壮一だ！」「なんだと！？」

「4代目のかたき

をとりにきたぞー！！」

「オダースのかたきとりか

！！」

「ああ、そつだ！」ジユウが

相川に聞く。

「ここは狭いから地下1階の練習場でやらないか？」

「たしかに狭いな。良かるう。上に行く

ぞ！」

「部下は待ってる！試練だからな」

「おう！いいぜ！」

「あと絶対来るな！来たら手助

けしそつだからな！」

「分

かつてる。」

「ボス！頑張つてね！」

「ああ、絶対勝つてくる！」勇希は相川を抜かし、エレベーターに乗った。「ボス、勝てるかな？」

「勝てるに決まってるだろが。付き合い短いくせに知つたような口叩きやがつて！」

「口叩いたっけ？」

「と、とにかく！勝つと信じとけば勝つんだよ」

「そんなもんなの？」

「そんなもんだよ！」

ファクロンは

床の間を出て行った。ウオスも少しため息をついて、出て行った。

Legend・17 相川壮一（後書き）

キャラクター紹介3 8・ルームニアス・ジエド（男）（20）バツスラー7人衆の1人。太い腕を持つ、パワー型。防御力もあるが、スピードが少し遅い。

9・ノブナガ・オブ・オダース（男）（年齢不明）実は霊のファイタンファミリー4代目ボス。光以外では死なない、不死身の体を持つ。消滅させたが、魂はまだ人間界をさまよっている。

10・Mr・ロトロ（男）（72）ビーストセツテやジュラシットウリニ、フュージョンボールなどを作った老人。昔は名高いマフィアだったらしく魔法の杖で戦ったらしい。

l e g e n d ・ f i n a l 決着！相川壮一 十文機平の底力！（前書き）

最終章スペシャルということで、文字数を増加しました。

Legend・final 決着！相川壮一 十文機平の底力！

バススラーアジト。

地下1階、練習場。

「試合開始だ」

合図とともに2人が飛び出す。

相川は剣を持っていてる。

それに対抗し、勇希も剣を抜く。

「お前が剣を抜いても、剣技なくしてオレには勝てん！」

「剣技かあ・・・。」

剣技じゃないけど剣の強化ならできるけどな」 「剣の強化だと

！？」 勇希は勇気の涙をとます。

するとソード・オブ・ダイアルが電気を帯びる。

「ハハハハ！それが剣強化か？剣が壊れる寸前じゃねえかよ」

「寸前で止めれば壊れやしねえよ」

「そうかよ。だがオレの剣は刃は鉄は鉄でも電気を通しにくい性質の鉄でね。電気を流しても意味がねえんだよな」

「やっぱりな」 勇希は手にさらに力を入れ

る。涙の色が濃い青からどす黒い赤に変わる。

「熱水の涙！」 ジュウは驚く。「あれはバススラ

ー次期ボスの証の技！」 「これで、ソード・オブ・ダ

イアルは高熱を帯びた。いくら電気を通しにくい性質の鉄でも熱は遮れないだろ」 「なかなか考えるな。だがオレの

剣技には勝てないかもな」 「また剣技、

剣技って、そんなに強いのかよ」 「答える必要はない」 相

川は襲って来る。勇希はソード・オブ・ダイアルで相川の剣を受け止める。相川の剣が少しずつ溶け出した。

「力入れると溶けるぜ」

「そうかな？」 ドカツ！相川はポケットに入れてい

た、鉄球を勇希の腹にぶつける。 「ぐはっっ！！」

手の力が抜けてソード・オブ・ダイアルを落としてしまう。

相川が言う。

「フアイタン剣技術、エスコンダクター」

相川はポケ

ットの鉄球を3こ取り出して勇希に投げる。そして、剣を振り回しながら勇希に向かう。

勇希はやられると思った。

が、スチャーン！

「やられたらヤバいんじゃないのか

よ」 前にはなんとトリケラトプス型のロボット。相川攻撃から勇希を守っている。

勇希、もう一度だけ助けてやる。これが最後の助けだがな」

ジュウが割り込む。

「そうだ。最後の助け、

その名も『十文機平混融合神』だ」

「勇希、お前は十文機平混融球の中にオレ達が入ったメモリーカードを入れる！それだけだ」 「あ・・・あ・・・」 勇

希はメモリーカードを十文機平混融球の中に入れる。すると十文機平混融球が光りだす。 パリパリパリ・・・。十文機平

混融球が割れる。ドカーン！！！！シユン！上に何かが飛んだ。

「十文機平ビージャラシング！」 みごとに10体合体している。 体もデカイ。

腕が4本あり、左は剣、右は大砲系の武器だ。

翼もつけている。

「これはすげえな」

「なにい！10体合体成功だと！？」

「いくぞ！相川。ぶつ殺す！」

ビージャラシングは右手の大砲からビー

ムを出す。

天井に当たった。

天井に穴が開く。

「鉄の壁に穴を開けるだど！？信じ

られん」 「これが十文機平の底力だぞ！」

これでは負けて父のかたきとりどころじゃなくなる。相川はそう思った。だが逃げる訳には行かないか・・・。逃げたら、それ

こそ父のかたきとりどころじゃない。行くしかないのか。

「オラアアア！」

相川はビージュラシン

グに向かって行った。

ビージュラシンは呟いた。

「さすが、ファイタン5代目だな・

。。。

だが、まだまだだ」

相川はビージュラシンに剣を突きつける。

ビージュラシンは避けて、相川をつまみ上げる。

「逃げな

った事は立派だな！だが、てめえの負けだ。まあ、勇希は倒したし、かたきとりにはなっただろ？オレはいつでも相手になってやる。出直してこい！」

ビージュラシンはさつき開けた

穴に相川を投げる。穴は外につながっていて、相川は外に出た。

「さ・・・すがだな十文機平・・・。また来るぜ。待ってる・・・よ」

相川は立ち上がりバツスラーアジトを後にした。

「ま、今回はバツスラーの勝利だな！勇希じゃなくて」

「うるせえよ！だけど、何で助けたの？オレの試練なんだから？」

「十文機平を作り上げるこ

れが今回の試練だ。簡単だったろ？」

「球にメモ

リーカード入れるだけだからな」

「ま、9代目には伝えておく。

十文機平試練クリアってな」

「うん！！」

「ボスさ〜ん！やったか？」

「ああ。殺してはないけど・・・。」

「あと、倒したのはオレだがな！」

「それ言うなよ！」

「ええ！ジユウが出る

なら右腕のオレが出たのによお！」

「ファクロンって右腕だったけ？

レジェダリーと思うんだけど・・・。」

「レジェダリーが右

腕ならオレはボス補佐だな」

「ボス補佐もレジェダリーだし・・・。」

「レジェ

ダリーばっかズル〜」

「まあ、

馬鹿はおいといて、良くやったぞ！オレが！」

「それ、もういいよ！〜」

「そういえば、新しいレストラン見つけたんで行かねえか？ちよ
ど昼だし」

「そうだな」

「オレ

も行くぞ！」

「ロボットって飯食うの？」

「食わねえな」

「じゃー、

行くなよ！」

「行く。部下探しに！」

「部下探すの〜！？」

何とか相川との戦いも終わり、町を襲い

そうなマフィアはいなくなった。マフィアのボスは大変だが、な
なか楽しい。だが、ジユウの話だとこれからが大変らしい。これか
らもうろんなマフィアと戦うことになるだろうがオレなりにやっ
ていこうと思う。

Legend of Mafia

(伝説のマフィア)を指し、今日もオレは頑張っている。

l e g e n d ・ f i n a l 決着！相川壮一 十文機平の底力！（後書き）

l e g e n d ・ o f ・ M a f i a を読んでいただき、ありがとうございます。
致します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4524f/>

legend・of・Mafia

2010年10月9日00時25分発行